の時とおなじ事にて、釜の蓋をしめざるもの也、外に替る事なし、諸道具も最前の物にてよし、品をかゆるは惡し、尤茶入は薄茶を入て堂庫にあらば、茶碗計持出置合る也、薄茶必別の物に入てよし、但濃ちやの殘りを薄茶に立る時は、初めの茶入に入たるまゝ置合立てよし、尤袋には不入也、

一薄茶立る時、ならひの心持あり、濃茶はさむる事をいとひて、さら〳〵と立る也、薄茶は其いとひなければ、ゑづかに爰にて茶を立る手前の心得を眞に致すべし、總て薄茶の立樣一通り手熟すれば、万事の手前成能物也、此ゆへに宗易も薄茶立る一通り、大事に心得よとゑめしたるとなり、

〔茶之湯六宗匠傳記六〕一薄茶點る時、或人利休にとふ、初め小壺を出し、薄茶の時はたとへ類座、或は小大海、或は内海などは、くるしかるまじきかと思ひ侍れば、利休答ていわく、其は惡し、薄茶は貴人の御前御遊び被成ての事也、若座敷替りてならば、くるしかるまじきか、同座にて二度御茶まいらば、初は眞なる故結構なる道具よし、後の薄茶は草也、物毎に眞草行の三段あり、其にゑたがわざれば物の品を失のふ、其上唐物も唐物計數多出すべからず、一種か二種かとの故人の式目也、殊更貴人など請じ申さば、左樣の道具出してもくるしかるまじきかなれ共、乍去茶入能て大海の類茶入程にあらずば益有まじ、又内海能ば、初の茶入を人々のさげすむべし、所詮片々はいづれやむべしと云々、又或人京のゑゆらくにて利休に問、某の持たる道具を初の度に出し、客遊び居て後に又薄茶たてん時、大海か内海を出し候はんやと問侍れば、利休の曰、初め瀨戸を出し、後から物を出し給はん事、たとへば貴人を申入て、百姓のもてなしをするに似たりと答られ侍れば、此人一言の返答にも及ばずと也、此人は世にかくれなき古瀨戸の茶入持にて、其一色の茶湯者と聞へ侍る也、又大坂にて古織公（古田織部正）に問、初小壺を出し、後今燒のふりのかわりたる